

氏 名	町 沙恵子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	乙第82号
学位授与年月日	2022（令和4）年3月7日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第5条第2項該当
学 位 論 文 題 目	Cross-speaker Repetition in Japanese: The Development of Conversation and Participant Relationships
論 文 審 査 委 員	主査 藤井洋子 （英文学専攻 教授） 副査 高梨博子 （英文学専攻 教授） 黒子康弘 （史学専攻 教授） 井出祥子 （本学名誉教授） 岩田祐子 （元国際基督教大学教授、本学非常勤講師）

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文では、日本語会話に頻繁に見られる他者の発話の繰り返しの言語行動(cross-speaker repetition、以下「他者発話の繰り返し」とする)に着目し、日本語における他者発話の繰り返しが円滑な会話および会話参加者の人間関係の構築にいかに関与するかに重要な貢献を成すかを論じる。分析には主に日本語の二重会話と三重会話のデータを用い、比較対照のために、一部でアメリカ英語の二重および三重会話データも用いる。日本語の二重および三重会話における他者発話の繰り返しの様々な側面と役割を検証した上で、考察では、なぜ他者の発話を繰り返すという行為が日本語に頻発し、会話運用および会話参加者の友好的関係の構築に貢献するのかという根本的疑問を解明する。ここでは日本文化と西洋文化における自己観(the notion of self)の違いに着目し、日本人の自己観が言語使用および他者との理想的人間関係の在り方に深く影響しており、他者発話の繰り返しという言語行動もその関係性の一部として日本語の特徴的な会話スタイルに大きく貢献していることを論じる。なお、本研究で扱う会話は、親密な話者同士によるインフォーマルなものに限定する。各章の詳細を以下に記す。

1章では、筆者が繰り返しの言語行動に関心を持った背景に触れた上で、本研究の目的を、日本語における他者発話の繰り返しの包括的理解への貢献と定める。特に、この言語行動が円滑な会話運用および会話参加者の人間関係の構築にどのような影響を与えるのかを詳細に記述することに焦点を定める。

2章では、繰り返しという言語行動が実際の会話では様々なスタイル（誰の発話を繰り返すのか、どの程度の同一性を持つのか、どのタイミングで繰り返すのか、など）で現れることを論じる。その上で、本研究の分析対象を、一続きの会話時間内に見られる、他者に

より発される内容語およびフレーズの繰り返しと定義する。また発話形式が完全に同一なものから一部変更されているが繰り返しと判断できるものまでを分析対象と定める。

3章では、繰り返しの言語行動に関する先行研究に触れる。中でも、本研究と最も関連する繰り返しのインタラクティブな側面について論じているTannen (1987, 1989), Norrick (1987), Johnstone (2002)に加え、日本語における繰り返しの出現、機能、および受容について論じているFujii (2012, 2018), Ochiai et al. (2005), Strauss and Kawanishi (1996), Ishikawa (1991)の研究概要を記す。

4章では、本研究で使用するデータについて解説する。本研究では、2種類の会話（二者会話および三者会話）を3つのソースから抽出して分析する。一つは異言語・異文化比較の実証研究のために設計されたデータ・コーパス、「ミスター・オー・コーパス」である。本研究では本コーパスの日本語および英語のペアによる自由会話（日本語12組、計68分、英語11組、計60分）を二者会話の分析に使用する。三者会話については、日本語会話はフジテレビ系トーク番組『ボクらの時代』から5エピソード（計107分）を、英語会話はオンラインポッドキャスト番組“Ladies Who Lunch”から1エピソード（計43分）を抽出して使用する。

5章では、二者会話に見られる他者発話の繰り返しの日英語比較分析を行う。分析は（1）繰り返しの頻度、（2）繰り返しの対象、（3）繰り返しの機能の3つの側面から行う。（1）については、日本語で英語の約2.6倍の頻度で繰り返しが多く起きることを示す。（2）では、他者発話の中でもどのような語が繰り返されるのかに着目し、日本語においては他者の感情、認識、評価といった主観的要素が多く繰り返されるのに対し、英語では事実や地名といった客観的要素がより多く繰り返されることを示す。さらに（3）については、日本語の繰り返しは他者の意見や感情に対する同意および共感の表明として機能し、会話参加者の相互理解やラポートを構築、強化するのにに対し、英語の繰り返しは会話内容の質問、回答、確認として機能し、明確な情報交換の助けとなることを示す。以上の分析から、出現頻度の違いに加えて、日英語では繰り返しは異なる志向性(orientation)を持つこと、すなわち日本語の繰り返しはラポート構築志向 (rapport-oriented) であり英語は情報明確化志向 (clarification-oriented) であることを論じる。

6章では、日本語の三者会話に見られる他者発話の繰り返しの焦点を絞り、『ボクらの時代』の会話データを分析する。三者会話では様々な種類の繰り返しが見られる。まず、繰り返しが三人の会話参加者のうちの二人のみの間で起こることがある。その際、繰り返しは二人の参加者をチームとして結びつけ、結束を強化すると同時に、残りの一人を一時的にチームの部外者として扱うことがある (teaming repetition)。また、チームとして結束した二人の参加者が互いの発話を繰り返しながら残りの一人をからかいつつ、会話内に愉快的な雰囲気を作り上げることがある (teasing repetition)。二つ目の形式として、三人の参加者全員が繰り返し行動に参加する場合もある。三人が短時間に連続的に同じ語を発する際、その繰り返し発話は三人の結束を即座に強化する (immediate threefold repetition)。また、三人が間隔を開けつつも互いの発話を繰り返しながら各々の発話を繋げて一つの話を共に構築する現象も見られる (repetition relay)。6章では、会話参加者がこれらの四種類の繰り返しを使いながら会話を円滑に展開しつつ、流動的に変化する自己の視点や参加者同士の関係性を会話内で効率的に表現することを示す。

7章では、日本語の三者会話の特徴的スタイルを解明するべく、繰り返しに加え、他者発話のパラフレーズ(paraphrasing)および協同発話構築(co-construction)の三つの言語行動を分析する。データは前章と同様に『ボクらの時代』の会話を使用し、日英語比較のために、一部で“Ladies Who Lunch”の英語の三者会話も参照する。ここではこの三つの言語行動が会話参加者の発話や思考、さらには参加者同士を結びつけ、協調的に会話を展開させる機能を共有することを示す。それは具体的には、参加者たちが互いの発話に容易にアクセスし、それを自己の発話に気軽に組み込んだり(繰り返し、パラフレーズ)、他者の未完成の発話の続きを察してそれを補うこと(協同発話構築)によって達成される。またこれらの言語行動は頻繁に共起・共働し、日本語の親密な話者同士による会話の協調的かつ友好的な性質を強化することを示す。以上の分析結果から、日本語の三者会話では、特に会話の盛り上がり部分において参加者たちが互いの発話を絡め合わせ、まるで三つ編み(braid)を編むかのように会話を展開していくことを指摘する。このイメージの類似性から、参加者たちの発話が密接に絡まり、つながり、参加者同士も結束していく会話構造の在り方を編み込み構造(braid structure)とし、モデルを提示しながら日本語の三者会話の協調的な会話展開の在り方を解説する。

8章では、そもそもなぜ日本語において他者発話の繰り返しの言語行動が頻発し、会話および会話参加者の友好的人間関係の構築に重要な役割を果たすのかという根本的な疑問を解明する。特に5章から7章の分析で顕在化した、日本語の他者発話の繰り返しの出現頻度の高さと会話参加者同士の強い結びつき、ラポートとの関係性に着目し、日本語話者が会話において自己と他者をどう位置づける(位置づけたい)か、という自己観がこの関係性を解明する鍵となると考える。哲学、社会心理学、異文化コミュニケーション研究、人類学、場の理論などの様々な学問領域で自己というものがどう捉えられてきたかを検証していくと、日本人の自己観が西洋人のそれとは対照的であることが判明する。具体的には、西洋文化では自己は独立的(independent)、自律的(autonomous)、二元論的(dualistic)であるべきと捉えられるのに対し、日本および東アジア文化では自己は相互依存的(interdependent)、集合的(collectivistic)、一元論的(monistic)なものとして理解される。これらの先行研究をもとに本研究では、日本人の持つ自己観を、自己と他者が「同一の全体に属する、関連する部分」(interrelated parts of the same whole)であり、「密接につながり相互に作用しつつ、同時に全体からも作用されるもの」(closely connected and mutually influencing as well as being influenced by the whole)であると結論付け、それゆえに会話という場においても参加者たちは自他非分離の状態にあると解釈する。

続いて、この日本文化における自他非分離の自己観が、日本人の行動的、言語使用的パターンにも大きく影響していることを論証すべく、自己観と関連が深いと考えられる文化的側面および言語的(文法的)特徴を挙げる。第一に、日本文化で広く普及し肯定的に受容されている日本特有の概念「甘え」には、自己と他者の密接な関わりを前提とするという、日本人の自己観に共通する基盤があることに触れ、さらに本研究のテーマである他者発話の繰り返しが会話内における自他非分離の状態を促進することを示唆する。第二に、日本語の文法的特徴である「無主語」も自他非分離の自己観、さらには他者発話の繰り返しの頻発に関係することに触れる。日本語では英語の“I”や“you”に相当する主語が用いられないことが多く、これは会話内で「びっくりした」、「焦った」のように話者が自

己の感情を表現する際も同様である。このように「誰が」どう感じたかという主語が現れないことで自他の境界が曖昧になり、会話参加者は互いの主観的情報にアクセスし、共通の感情として共感しやすくなる。この無主語が共感機能を持つ繰り返し(empathizing repetition)の頻用につながり(5章)、さらにそれが会話参加者の自他非分離の状態を促進すると考察する。8章後半ではこの日本人の自己観、文化的側面、文法的特徴、そして他者発話の繰り返しの四つの密接な関わりを指摘する。

最終章では、本研究の意義と分析上の限界に加え、今後の展望に触れる。本研究では日本語会話に見られる他者発話の繰り返しを主に文化的特異性の観点から検証したが、他者発話の繰り返しは本来あらゆる言語文化に見られる普遍的人間行動でもある。この言語行動の普遍的側面を解明すべく、今後の展望として、心理学、人類学、行動学、認知科学などの観点も含めてさらに研究していく必要性を指摘する。

参考文献

- Fujii, Yoko. (2012) "Differences of situating self in the place/*ba* of interaction between the Japanese and American English speakers." *Journal of Pragmatics* 44 (5): 636-662.
- 藤井洋子(2018)「個を基体とする言語行動」と「場を基体とする言語行動」—英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より—社会言語科学, 21 (1): 129-145.
- Ishikawa, Minako. (1991) "Iconicity in discourse: The case of repetition." *Text* 11 (4): 553-580.
- Johnstone, Barbara. (2002) *Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell.
- Norrick, Neal R. (1987) "Functions of repetition in conversation." *Text* 7 (3): 245-264.
- 落合るみ子, 植野貴志子, 野村佑子(2005) 日本語会話における同調促進装置としてのあいづち、繰り返し、テイクオーバー: 米語会話との比較から日本女子大学大学院文学研究科紀要, 12: 29-41.
- Strauss, Susan, and Yumiko Kawanishi. (1996) "Assessment strategies in Japanese, Korean, and American English." *Japanese/Korean Linguistics* 5: 149-165. Stanford, CA: CSLI
- Tannen, Deborah. (1987) "Repetition in conversation: Towards a poetics of talk." *Language* 63 (3): 574-605.
- Tannen, Deborah. (1989) *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

論文審査結果の要旨

論文の内容の要旨

本論文は、日本語会話における他者の発話の繰り返しの言語行動(cross-speaker

repetition)に着目し、繰り返しがなぜ日本語に頻発し、肯定的に解釈され、円滑な会話および会話参加者の人間関係の構築に重要な貢献をなすのかという根本的疑問について、日本人の自己観や「甘え」という文化的現象に着目し、哲学、社会心理学、人類学などの学問領域からの知見をもとに解明することを試みたものである。

本論文は、全文249ページ（本文219ページ、参考文献21ページ、 APPENDIX 9ページ）であり、構成は、以下の通りである。

- Chapter 1. Introduction
 - 1.1 Motives of the Study
 - 1.2. Research aims
 - 1.3. Overview
- Chapter 2. What Is Repetition?: Theoretical Framework of Linguistic Repetition
 - 2.1. What is linguistic repetition?
 - 2.2. Classification of linguistic repetition in conversation
- Chapter 3. Literature Review
 - 3.1. Introduction
 - 3.2. General view of linguistic repetition
 - 3.3. Repetition in conversation
 - 3.4. Repetition in Japanese conversation
- Chapter 4. Data and Focus of Study
 - 4.1. Data overview
 - 4.2. Mister O Corpus
 - 4.3. “*Bokura no Jidai*” (“Our Generation”)
 - 4.4. “Ladies Who Lunch”
- Chapter 5. Comparative Analysis: Repetition in Dyadic Conversation in Japanese and American English
 - 5.1 Introduction
 - 5.2. The frequency of repetition
 - 5.3. The content of repetition
 - 5.4. The function of repetition
 - 5.4.1. Agreeing
 - 5.4.2. Empathizing
 - 5.4.3. Asking and answering questions
 - 5.4.4. Confirming
 - 5.4.5. Linking
 - 5.4.6. Others
 - 5.5. Summary of the comparative study: Two different orientations of repetition in Japanese and American English
- Chapter 6. Close Analysis of Repetition in Triadic Conversation in Japanese
 - 6.1. Introduction

	6.2. The different repetition patterns in dyadic and triadic Conversations
	6.3. Repetition between two participants in a triadic Conversation
	6.3.1. Repetition as a device for teaming
	6.3.2. Repetition as a device for teasing
	6.3.3. The difference between teaming and teasing repetitions
	6.4. Repetition between three participants
	6.4.1. Immediate threefold repetition
	6.4.2. Repetition relay
	6.5. The co-occurrence of various types of repetition and how the participants manage their relationship
	6.6. Summary of repetition in triadic conversation in Japanese
Chapter 7.	“Braid Structure” Conversations: Analysis of Japanese Conversational Style Created by Repetition and Other Linguistic Devices
	7.1. Introduction
	7.2. Rethinking conversational style in the Japanese language
	7.3. Previous studies on Japanese conversational style: <i>Kyowa</i> ‘cooperative talk’
	7.4. Analysis: How the three linguistic devices contribute to the creation of the “braid structure” conversation
	7.4.1. Repetition
	7.4.2. Paraphrasing
	7.4.3. Co-construction of a sentence/story
	7.5. Braid structure of informal Japanese conversation
	7.6. Summary of braid structure conversation and the practices of repetition, paraphrasing, and co-construction of sentence/story
Chapter 8.	Discussion: Why Repetition? From the Perspective of Notion of “Self” in Japanese Culture and Language
	8.1. Introduction
	8.2. The notion of the “self”: Studies on the divergent self-systems in Western and Asian cultures in various academic fields
	8.2.1. From a philosophical perspective
	8.2.2. From a social psychological perspective
	8.2.3. From the perspective of cross-cultural communication study
	8.2.4. From an anthropological perspective
	8.2.5. From the perspective of the theory of <i>ba</i>
	8.2.6. Summary of the divergent notions of the self
	8.3. Self-related cultural concept, <i>amae</i>
	8.4. How the Japanese notion of the self, the concept of <i>amae</i> , and the linguistic practice of cross-speaker repetition are interrelated
	8.5. Self-related grammatical element: The non-occurrence of the sentential

subject in Japanese

8.6. How the Japanese notion of self, the non-occurrence of the sentential subject, and the practice of empathizing repetition are interrelated

8.7. Summary of discussion

Chapter 9. Conclusion

9.1. Overview

9.2. The significance and limitations of this study

9.3. Possibilities for future development

References

Appendix

本論文では、日本語会話に頻繁に見られる他者の発話の繰り返しの言語行動(cross-speaker repetition、以下「他者発話の繰り返し」とする)に着目し、日本語における他者発話の繰り返しが円滑な会話および会話参加者の人間関係の構築にいかに関与するかを論じる。分析には主に日本語の二国会話と三国会話のデータを用い、比較対照のために、一部でアメリカ英語の二者および三国会話データも用いる。日本語の二者および三国会話における他者発話の繰り返しの様々な側面と役割を検証した上で、考察では、なぜ他者の発話を繰り返すという行為が日本語に頻発し、会話運用および会話参加者の友好的関係の構築に貢献するのかという根本的疑問を解明する。ここでは日本文化と西洋文化における自己観(the notion of self)の違いに着目し、日本人の自己観が言語使用および他者との理想的人間関係の在り方に深く影響しており、他者発話の繰り返しという言語行動もその関係性の一部として日本語の特徴的な会話スタイルに大きく貢献していることを論じる。なお、本研究で扱う会話は、親密な話者同士によるインフォーマルなものに限定する。各章の詳細を以下に記す。

1章では、筆者が繰り返しの言語行動に関心を持った背景に触れた上で、本研究の目的を、日本語における他者発話の繰り返しの包括的理解への貢献と定める。特に、この言語行動が円滑な会話運用および会話参加者の人間関係の構築にどのような影響を与えるのかを詳細に記述することに焦点を定める。

2章では、繰り返しという言語行動が実際の会話では様々なスタイル（誰の発話を繰り返すのか、どの程度の同一性を持つのか、どのタイミングで繰り返すのか、など）で現れることを論じる。その上で、本研究の分析対象を、一続きの会話時間内に見られる、他者により発される内容語およびフレーズの繰り返しと定義する。また発話形式が完全に同一なものから一部変更されているが繰り返しと判断できるものまでを分析対象と定める。

3章では、繰り返しの言語行動に関する先行研究に触れる。中でも、本研究と最も関連する繰り返しのインタラクティブな側面について論じているTannen (1987, 1989), Norrick (1987), Johnstone (2002)に加え、日本語における繰り返しの出現、機能、および受容について論じているFujii (2012, 2018), Ochiai et al. (2005), Strauss and Kawanishi (1996), Ishikawa (1991)の研究概要を記す。

4章では、本研究で使用するデータについて解説する。本研究では、2種類の会話（二者

会話および三者会話)を3つのソースから抽出して分析する。一つは異言語・異文化比較の実証研究のために設計されたデータ「ミスター・オー・コーパス」である。本研究では本コーパスの日本語および英語のペアによる自由会話(日本語12組、計68分、英語11組、計60分)を二者会話の分析に使用する。三者会話については、日本語会話はフジテレビ系トーク番組『ボクらの時代』から5エピソード(計107分)を、英語会話はオンラインポッドキャスト番組“Ladies Who Lunch”から1エピソード(計43分)を抽出して使用する。

5章では、二者会話に見られる他者発話の繰り返しの日英語比較分析を行う。分析は(1)繰り返しの頻度、(2)繰り返しの対象、(3)繰り返しの機能の3つの側面から行う。(1)については、日本語で英語の約2.6倍の頻度で繰り返しが多く起きることを示す。(2)では、他者発話の中でもどのような語が繰り返されるのかに着目し、日本語においては他者の感情、認識、評価といった主観的要素が多く繰り返されるのに対し、英語では事実や地名といった客観的要素がより多く繰り返されることを示す。さらに(3)については、日本語の繰り返しは他者の意見や感情に対する同意および共感の表明として機能し、会話参加者の相互理解やラポートを構築、強化するのにに対し、英語の繰り返しは会話内容の質問、回答、確認として機能し、明確な情報交換の助けとなることを示す。以上の分析から、出現頻度の違いに加えて、日英語では繰り返しは異なる志向性(orientation)を持つこと、すなわち日本語の繰り返しはラポート構築志向(rapport-oriented)であり英語は情報明確化志向(clarification-oriented)であることを論じる。

6章では、日本語の三者会話に見られる他者発話の繰り返しの焦点を絞り、『ボクらの時代』の会話データを分析する。三者会話では様々な種類の繰り返しが見られる。まず、繰り返しが三人の会話参加者のうちの二人のみの間で起こることがある。その際、繰り返しは二人の参加者をチームとして結びつけ、結束を強化すると同時に、残りの一人を一時的にチームの部外者として扱うことがある(teaming repetition)。また、チームとして結束した二人の参加者が互いの発話を繰り返しながら残りの一人をからかいつつ、会話内に愉快的な雰囲気を作り上げることがある(teasing repetition)。二つ目の形式として、三人の参加者全員が繰り返し行動に参加する場合もある。三人が短時間に連続的に同じ語を発する際、その繰り返し発話は三人の結束を即座に強化する(immediate threefold repetition)。また、三人が間隔を空けつつも互いの発話を繰り返しながら各々の発話を繋げて一つの話と共に構築する現象も見られる(repetition relay)。6章では、会話参加者がこれらの四種類の繰り返しを使いながら会話を円滑に展開しつつ、流動的に変化する自己の視点や参加者同士の関係性を会話内で効率的に表現することを示す。

7章では、日本語の三者会話の特徴的スタイルを解明するべく、繰り返しに加え、他者発話のパラフレーズ(paraphrasing)および協同発話構築(co-construction)の三つの言語行動を分析する。データは前章と同様に『ボクらの時代』の会話を使用し、日英語比較のために、一部で“Ladies Who Lunch”の英語の三者会話も参照する。ここではこの三つの言語行動が会話参加者の発話や思考、さらには参加者同士を結びつけ、協調的に会話を展開させる機能を共有することを示す。それは具体的には、参加者たちが互いの発話に容易にアクセスし、それを自己の発話に気軽に組み込んだり(繰り返し、パラフレーズ)、他者の未完成の発話の続きを察してそれを補うこと(協同発話構築)によって達成される。またこれらの言語行動は頻繁に共起・共働し、日本語の親密な話者同士による会話の協調的かつ友好

的な性質を強化することを示す。以上の分析結果から、日本語の三者会話では、特に会話の盛り上がり部分において参与者たちが互いの発話を絡め合わせ、まるで三つ編み (braid) を編むかのように会話を展開していくことを指摘する。このイメージの類似性から、参与者たちの発話が密接に絡まり、つながり、参与者同士も結束していく会話構造の在り方を編み込み構造(braid structure)とし、モデルを提示しながら日本語の三者会話の協調的な会話展開の在り方を解説する。

8章では、そもそもなぜ日本語において他者発話の繰り返しの言語行動が頻発し、会話および会話参与者の友好的人間関係の構築に重要な役割を果たすのかという根本的な疑問を解明する。特に5章から7章の分析で顕在化した、日本語の他者発話の繰り返しの出現頻度の高さと会話参与者同士の強い結びつき、ラポートとの関係性に着目し、日本語話者が会話において自己と他者をどう位置づける（位置づけたい）か、という自己観がこの関係性を解明する鍵となると考える。哲学、社会心理学、異文化コミュニケーション研究、人類学、場の理論などの様々な学問領域で自己というものがどう捉えられてきたかを検証していくと、日本人の自己観が西洋人のそれとは対照的であることが判明する。具体的には、西洋文化では自己は独立的(independent)、自律的(autonomous)、二元論的(dualistic)であると捉えられるのに対し、日本および東アジア文化では自己は相互依存的(interdependent)、集合的(collectivistic)、一元論的(monistic)なものとして理解される。これらの先行研究をもとに本研究では、日本人の持つ自己観を、自己と他者が「同一の全体に属する、相関する部分」(interrelated parts of the same whole)であり、「密接につながり相互に作用しつつ、同時に全体からも作用されるもの」(closely connected and mutually influencing as well as being influenced by the whole)であると結論付け、それゆえに会話という場においても参与者たちは自他非分離の状態にあると解釈する。

続いて、この日本文化における自他非分離の自己観が、日本人の行動的、言語使用的パターンにも大きく影響していることを論証すべく、自己観と関連が深いと考えられる文化的側面および言語的（文法的）特徴を挙げる。第一に、日本文化で広く普及し肯定的に受容されている概念「甘え」には、自己と他者の密接な関わりを前提とするという、日本人の自己観に共通する基盤があることに触れ、さらに本研究のテーマである他者発話の繰り返しが会話内における自他非分離の状態を促進することを示唆する。第二に、日本語の文法的特徴である「無主語」も自他非分離の自己観、さらには他者発話の繰り返しの頻発に関係することに触れる。日本語では英語の“I”や“you”に相当する主語が用いられないことが多く、これは会話内で「びっくりした」、「焦った」のように話者が自己の感情を表現する際も同様である。このように「誰が」どう感じたかという主語が現れないことで自他の境界が曖昧になり、会話参与者は互いの主観的情報にアクセスし、共通の感情として共感しやすくなる。この無主語が共感機能を持つ繰り返し(empathizing repetition)の頻用につながり（5章）、さらにそれが会話参与者の自他非分離の状態を促進すると考察する。8章後半ではこの日本人の自己観、文化的側面、文法的特徴、そして他者発話の繰り返しの四つの密接な関わりを指摘する。

最終章では、本研究の意義と分析上の限界に加え、今後の展望に触れる。本研究では日本語会話に見られる他者発話の繰り返しを主に文化的特異性の観点から検証したが、他者発話の繰り返しは本来あらゆる言語文化に見られる普遍的人間行動でもある。この言語行

動の普遍的側面を解明すべく、今後の展望として、心理学、人類学、行動学、認知科学などの観点も含めてさらに研究していく必要性を指摘する。

論文審査の要旨と結果

審査委員会では本論文の積極的に評価できる学術的価値として以下の見解が表明された。

本研究は、日本語会話に頻繁に見られる他者発話の「繰り返し」という言語行動に焦点を当て、日英語比較を通し、日本語における「繰り返し」が円滑な会話および会話参与者同士の人間関係の構築に重要な貢献をなしていることを実証的・理論的に論じた独創的かつ挑戦的論文である。

「繰り返し」という談話現象は、これまで欧米の研究において否定的な評価をされてきたが、本論文では、日英語会話のデータを用いて微視的・巨視的視点をもって精緻に分析・考察し、英語の「繰り返し」に対する否定的な評価とは異なり、日本語の会話では重要な要素であることを実証的に提示した。その上で、英語に比して2.6倍もの出現頻度の高さをもつ日本語の「繰り返し」について、なぜ日本語会話に頻発し、会話運用および会話参与者の友好的関係の構築に貢献するのかという根本的疑問に対して、哲学、社会心理学、人類学および場の理論の知見を援用することで、その解釈に関する根源的な解明に取り組んだものである。これは、これまでの語用論、社会言語学の諸研究では見られない野心的な試みであり、その独創性が高く評価できる。

実証的には、まず、二者会話に見られる日英語比較分析を行い、日本語では英語の約2.6倍の頻度で「繰り返し」が出現することを明らかにし、両言語において繰り返しは異なる志向性を持つこと、すなわち日本語の繰り返しはラポート構築志向(rapport-oriented)であり、英語は情報明確化志向(clarification-oriented)であることを示した。次に、日本語の三者会話に見られる繰り返しでは、会話参与者が4種類 (teaming repetition, teasing repetition, immediate threefold repetition, repetition relay) の繰り返しを用いながら会話を円滑に展開しつつ、動的に変化する自己の視点や参与者同士の関係性を発展させていることを明らかにした。さらに、これらの分析結果をもとに、日本語の会話は「編み込み構造(braid structure)」であるとし、日本語の協調的な会話展開の在り方を提示したことは、これまで提示されてきた「共話」というモデルに対する新たなモデルの提案であり、比較研究という研究手法から発した日本語の会話研究に新しい示唆を与えているとして高く評価された。

本研究の更なる独創的、挑戦的な点は、このような「繰り返し」の実証的分析結果の提示に留まらず、日英語の繰り返し現象の違いを会話における自己観との関係性から解明しようと試み、哲学、社会心理学、異文化コミュニケーション研究、人類学、場の理論などの様々な学問領域から検証・考察した点にある。その結果、日本人の自己観は自己と他者が「同一の全体に属する、相関する部分」であり、「密接に繋がり、作用しつつ、同時に全体からも作用されるもの」で自己と他者は自他非分離となる。日本語の「繰り返し」の言語行動は、この自他非分離の状態を促進するものであると結論づけた。このような解明には深い洞察と幅広い研究が求められるが、そのことに果敢に挑み、多角的な視点をもって立証を試みている点に対し、審査員より、一定の成果と説得力が認められるという評価を得た。

このような結果より、本論文は、文法構造の一般的特徴が全ての言語に共通し、各言語

の使用者間に厳密な意味での存在論的差異は無いとする英語中心主義的な言語観・言語理論の批判を試み、それを相対化する、別のより本質的な言語観・理論の構築（「場の理論」はその一つ）に参画するものとして、会話における「繰り返し」について再評価を行った意義が認められる。これらのことから、本論文は、国内外の学界においてこれまでみられることのなかった斬新なものであり、今後の言語研究のみならず諸研究の方向性を大きく革新する可能性を秘めている画期的論文であると考えられるとの評価が得られた。

以上、本論文の評価すべき主要な点をあげたが、審査委員会では、以下のような指摘がなされた。まず、日本人と西洋人の存在論的差異について、デカルトの「コギト」をそのまま基本了解として持ち出すことは注意を要するところである。つまり、デカルト自身の議論の意図と、後世のいわゆるカルテジアンのスtereオタイプの理解にはかなりの懸隔があることを踏まえれば、むしろ町氏も指摘する啓蒙主義以降の一般的な近代的思考法の方に、よりその注意を向けるべきかもしれない。西洋近代のものとされる「主—客」の分離という思考装置自体を史的・哲学的に批判したうえで、はじめて、本論文で基本了解としている西欧とアジアの自己（自我）の構成の差異について十全に主張できるのではないかという指摘である。この点については、「自己（自我）」の構造、その拡大・拡張のあり方、世界内自己了解に関しての、哲学的な根本批判の基本的手続きを加え得れば、第8章における各論拠の可能性を一層引き出すことができるのではないかと示唆を得た。一方、実証的な点においては、データの収集方法とその種類について、更に多様なデータ分析の必要性を提案されると同時に、分析においても会話を構成する重要な要素であるプロソディやノンバーバルな現象への追究があると研究の包蔵する可能性はより大きいと予想されたとの指摘があった。また、本研究では分析対象とされていない構造レベルの繰り返しに着眼点を置くことで、繰り返しは同一性だけでなく、対比を際立たせるものとして談話構造や文化の型にもつながる重要なポイントであり、町氏が論じる「日本人の会話のスタイル」の解明にも大きく関わってくる問題ではないかとの意見が出された。

本論文は、このような大小の問題点は指摘できるものの、本節冒頭でも述べたとおり、英語を始めとする西欧の言語の分析をもとに発展してきた語用論の理論的モデルである「人間（話者）が理性をもって自らの意思を相手に伝えることが発話である」という前提に対し、そのような枠組みでは捉えられない現象があることを日本語データの精緻な分析により実証しており、今後の言語研究のみならず諸研究の方向性を大きく革新する可能性を秘めている画期的論文であるとの評価を得た。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士学位論文に相応しいものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをここに報告するものである。